

ココロを解放する好機！

森 孝之

(ナチュラリスト・アイトワ主宰)

岐阜県内の千二百坪の山林で、自給自足の循環型生活を目指す終の棲家を手作り中の知り合い一家から、「中学生と高校生の娘がコロナで自宅待機になり、おかげで家族揃って懸案作業に取り組んでいます」と、喜びの知らせがあった。続いて、料理人から大工に転身し、親方と結婚して京都郊外で田舎暮らしを始めた知り合いの女性が、コロナ自主閉塞の日々を、畑もある山林二千坪の自宅で仕事もはかどり「有意義に活かしています」と、弾んだ声で感謝の念を伝えてきた。

人生のある時期に工業文明や企業社会に疑問

を抱き、自然と寄り添う生活を始めた人々にとって、コロナによる自粛生活は、災難であるより、感謝の対象でさえあるようだ。そんなわけで、わが家のコロナ騒動は、喜びの声に彩られた。まことに、人生とは「選択と決断の森」を駆け抜ける小史というべきではなからうか。

工業文明や企業社会は、消費者を「王様」とおだてあげ、一億総中流社会と油断させ、挙句のはては貧富の格差におとしこむものと睨んで、会社員生活を脱し、著作活動に入ったのは、京都郊外小倉山の千坪の土地で循環型生活を軌道に乗せた今から半世紀近くも前だった。世の

中ではバブルが露わになりかけていた。二年後に処女作で「ポスト消費社会の旗手たち」を指そう、と工業文明に警鐘を鳴らしたが、バブル全盛の世間からは見向きもされなかった。その後も、企業社会は人々に「願望の未来」

森 孝之（もり・たかゆき）



一九三八年生まれ。工業デザインを学び、伊藤忠商事に入社、ワールド社長室長、大垣女子短大長などを歴任。この間に親から受け継いだ京都・小倉山の千坪の荒地地を、二百種千本の木が茂る自然循環型生活空間に生まれ変わらせ、「アイトワ」との愛称を与えて公開。妻は創作人形作家森小夜子。近刊にコロナ騒動のなか創造的な生き方に拍車をかけた仲間の実践事例を集めた『次の生き方 Vol.2 自然に寄り添う人たち』。

の到来を夢見させ、ハウツーやマニユアル漬けの生身のロボットのごとき企業戦士を増やし、「お金さえあれば一人でも生きて行けそう」との幻想を振りまいた。しかし、その実態は、すべての人を環境破壊の道連れにしながら、人間を単独では生きていけない自己完結能力のない唯一の高等動物、つまり「消費者」へと改造することであった。

有史以来、日々の暮らしの「生産の場」であった庶民の家屋までが、工業製品を買いあさって使い捨てる「消費の場」になった。

今から一五〇年余以前の一九世紀に、パリで開かれた第二回万博は、「人間による人間の搾取に替えて、機械による自然の活用」とのスローガンを掲げ、人々の欲望を大々的に解放する画期的な役割を果たした。だが今や、経済戦争は消耗戦の様相を呈し、地球温暖化が進み、野生生物の絶滅、南北格差拡大、あるいは難民問題やリストラなどと、弱いものから順に窮地に追いやっている。竜巻や巨大台風が明日にもわが家をまるごともっていきかねない不安が、現実のものになった。そこにコロナ禍までがやって

きたわけだ。

私たちは「必然の未来」を、見たくなくとも見据えるべき時を迎えたのではないか。

ケネディー大統領の補佐官だった、アーサー・シュレジンジャーは、「一九世紀の偉大なる英雄たちは二一世紀の極悪人への道を歩みつつある」と助言した。昨年は、コロンプスを始め多くの英雄たちの像が、民衆の手によって破壊され、そうした像を設置していた施設が自主撤去するニュースが次々と流れた。いよいよ「必然の未来」を希求する民衆の想いが露わになり始めた、と見た。

しかし、世界のリーダーは（ヒトに寄生しなければ自活力のない）コロナウイルスを人類共通の敵とみて結束すれば、二週間もあれば干上がらせ得るとの説もある中で、いまだに国や人を分断し、イタチゴッコに陥れている。このままではワクチンなどを巡って新たな格差を露わにさせるキツカケになりかねない。

思えば、人類史は「ドロボウ史」であった。産業革命以前は人が人を搾取する「カラダドロボウ」であり、その後はきれいな水や地下資源

などをむさぼる「自然ドロボウ」を流行らせた。そして今や日本では付度に支えられた「権力ドロボウ」の時代になり、ココロまで蝕む末期的症状を呈している。

コロナ禍の今こそ、家屋を、お金という目に見えない鎖に縛られた檻に留めず、世界の趨勢に目を向けながら足元の暮らしを見つめなおし、欲望の解放ではなくココロの解放を求め、手作り文化の綾なす時空へと再構築する好機として活かすべきだ。

人生とは、大胆な「方向転換」もいとわぬ心構えが誘う小史でもある。